

# 世俗化された国家についての一考察

赤 川 理

はじめに

一 世俗化された国家の性格

二 世俗化された国家の正当化

三 世俗化された国家が直面している問題

おわりに

はじめに

本論文は、ベッケンフェルデの「世俗化された国家」についての講演を基にした論文<sup>(1)</sup>を紹介することを通して、以下のことを検討する。第一に、世俗化された国家が、どのような性格を有するのかを検討する<sup>(2)</sup>。第二に、世俗化された国家が、どのように正当化されるのかを検討する<sup>(3)</sup>。第三に、世俗化された国家が、現在直面している問題を検討する<sup>(4)</sup>。

世俗化された国家とは何か。さまざまな宗教を信じる人々、また、さまざまな世界観を有する人々が一緒に生活するには、何らかの仕組みが必要である。この仕組みのひとつとして作り出されたのが、世俗化された国家である。世俗化された国家は、「……さまざまな宗教的信条と世界観の人々が、平和に、また、自由のうちに、共通の秩序の中で、また、共通の秩序の下で生活することができることを可能にした」<sup>(5)</sup>。その意味において、世俗化された国家は、「画期的政治的文化成果」<sup>(6)</sup>である。

一 世俗化された国家の性格

(一) 宗教と国家の分離

世俗化された国家は、どのような性格を有するのだろうか。世俗化された

国家は、「……宗教が、または、ある特定の宗教が、もはや国家的秩序の拘束力をもつ基盤、また、酵素（Ferment）ではない」<sup>(7)</sup>国家である。世俗化された国家においては、「国家と宗教は……原則的にお互いから切り離されており、国家は、それ自体として何らの宗教も有しないし、また、主張しない」<sup>(8)</sup>。「宗教による包み込み」<sup>(9)</sup>は、「……古代、また、中世においては、政治的秩序にとって長い間規定的であった……」<sup>(10)</sup>。しかし、国家は、「……宗教による包み込みから……解放され、また、その限りで世俗化された」<sup>(11)</sup>。そして、国家は、「……世俗的目的だけを追求し、また、それから正当化される」<sup>(12)</sup>ことになった。

世俗化された国家においては、宗教と国家は分離される<sup>(13)</sup>。国家が世俗化される前は、宗教と国家は分離されていなかったもので、国家は人間の宗教生活を含めた生活全体を包括していたことになる。ところが、国家は、世俗化されることによって、「……人間のあらゆる生活領域をみずからのうちに取り入れる包括的な共同体（Gemeinwesen）」<sup>(14)</sup>ではなくなってしまう。「しかし、宗教は、世俗化された国家によって、決して否定されたり、あるいは、わきに置かれたりしない」<sup>(15)</sup>。つまり、宗教と国家が分離されたからといって、国家は「神なき国家」<sup>(16)</sup>へと行きつくわけではなく、世俗化された国家も宗教とかかわらざるを得ない<sup>(17)</sup>。ベッケンフェルデは、世俗化された国家と宗教の関係<sup>(18)</sup>について、次のように論じる。「……一方で、宗教は国家から解放され、自由の中におかれる」<sup>(19)</sup>。「その〔宗教の〕許可、組織、また、行使は、もはや国家の事柄ではなく、国家によって導かれないし、また、指揮されない」<sup>(20)</sup>。すなわち、世俗化された国家と宗教の関係の第一の側面として、宗教が国家から解放されるという側面がある<sup>(21)</sup>。「しかし、他方で、国家とその法秩序からの宗教の自由と実効性は、その〔国家の〕世俗的な任務と目的の観点の下で限定される」<sup>(22)</sup>。つまり、宗教の国家からの解放は、宗教があらゆる事柄において国家から自由に行動できることを意味しない。宗教は国家の世俗的目的によって制限を受ける。これが、世俗化された国家と宗教の関係の第二の側面である。

宗教の国家からの解放には、もうひとつの側面がある<sup>(23)</sup>。宗教は、「……政治的意思形成の存続するプロセスにしたがって……共同生活の形態と秩序の方向づけに影響を及ぼすことができ、また、影響を獲得することができる」<sup>(24)</sup>。「宗教的な動機から導き出される目標、また、要求を政治的に支持することは……決して排除されない」<sup>(25)</sup>。つまり、宗教の国家からの解放には、二つの側面がある。第一の側面は、前の段落で述べたように、宗教が国家によって干渉されないということであった。第二の側面は、国家の領域と区別された社会の領域を通じてであれば、宗教は政治的なはたらきをすることができるということである。

## (二) 中立の二つの構想

「世俗化された国家は……宗教中立的国家として振舞い、また、みずからを宗教中立的国家として理解する」<sup>(26)</sup>。ベッケンフェルデは、国家が宗教中立的であることについて、次の三つのことを指摘する<sup>(27)</sup>。第一に、世俗化された国家は、「……何らの宗教とも、あるいは、何らの宗教共同体とも、また、その欲求とも自己同一化しない……」<sup>(28)</sup>。第二に、世俗化された国家は、「……宗教に、宗教的自由の保証を通して、固有の発展への余地を与える……」<sup>(29)</sup>。第三に、宗教には、「……国家的制度と官職へ干渉すること、ならびに、国家それ自体を宗教的中立の原理から方向転換させること」は、禁じられている<sup>(30)</sup>。第一の指摘と第三の指摘については「問題がない」<sup>(31)</sup>。「……決定的な問題は、国家の法秩序の枠内における宗教的自由の展開の余地の範囲と限界……」<sup>(32)</sup>である。すなわち、第二の指摘が問題である。

国家の中立に二つの構想が形成された<sup>(33)</sup>ことは、この第二の指摘にかかわる。国家の中立の構想のひとつは、「距離を置く中立の構想 (das Konzept der distanzierenden Neutralität)」である<sup>(34)</sup>。もうひとつは、「決定的開放的中立の構想 (das Konzept der übergreifenden offenen Neutralität)」である<sup>(35)</sup>。「距離を置く中立」は、宗教を私的な領域に封じ込める<sup>(36)</sup>。これに対して、「決定的開放的中立」は、宗教に「公的な領域における発展の余地も」<sup>(37)</sup>与える。

「距離を置く中立の構想」と「決定的開放的中立の構想」の相違は、外形的なものだけではない<sup>(38)</sup>。二つの構想の相違は、「聖職者的・宗教的 (geistlich-religiösen)」観点と「世俗的・政治的」観点を同時に有する領域において作用する<sup>(39)</sup>。キリスト教、イスラム教、ユダヤ教のように、宗教が「……世俗における生活、また、そのための振舞いに関する命令もみずからのうちに含む」<sup>(40)</sup>ところでは、聖職者的・宗教的観点と世俗的・政治的観点を同時に有する領域は、いたるところに存在する<sup>(41)</sup>。「距離を置く中立は……法秩序を純粹に世俗的に形態づけ、宗教的観点を重要でないもの、また、私的なものとして拒否する……」<sup>(42)</sup>。「……これに対して、開放的中立は、国家的秩序の世俗的目的と調和し得る限りで、信条 (Bekenntnis) と公的領域においても宗教にしたがって生活を営む可能性が、法秩序によって許容され、また、それ〔法秩序〕に引き入れられることによって」<sup>(43)</sup>、調整をはかろうとする<sup>(44)</sup>。つまり、フランス型の中立である「距離を置く中立」は、宗教を私的領域に抑え込むことを目標とするのに対して、ドイツ型の中立である「決定的開放的中立」は、世俗的目的とバランスがとれれば、公的領域において宗教を表出することを許容する、というのである。

## 二 世俗化された国家の正当化

それでは、以上のような性格を有する世俗化された国家は、どのように正当化されるのだろうか。「……人間の共同生活を組織し、また、規律する……」<sup>(45)</sup>「政治的秩序」<sup>(46)</sup>が、「宗教と政治的秩序の分離」<sup>(47)</sup>を出発点にすることは、決して自明なことではない<sup>(48)</sup>のだから、何が世俗化された国家に正当性を与えるのか<sup>(49)</sup>は、当然問題になる。

### (一) 伝統的正当化

第一の正当化は、「伝統的正当化」<sup>(50)</sup>である。中世において、また、初期近代においては、世俗の領域において教會的・宗教的なものが優越するという要求が広くいきわたっていた<sup>(51)</sup>。伝統的正当化は、「……世俗の領域にお

ける教会的・宗教的優越の要求をはねつけることから生じた……」<sup>(52)</sup>。社会にはさまざまな宗教を信じる人々が生活しており、世俗の領域においてさまざまな宗教がそれぞれみずからが優越することを要求すれば、争いが起こるのは当然である。実際に、ヨーロッパにおいては、「宗教戦争」という事態にまでなった<sup>(53)</sup>。ベッケンフェルデは、政治的秩序が宗教的要求に対して優越を獲得する過程、すなわち、国家の世俗化の過程を次のように描き出す。「……政治的秩序は、人間の共同生活における公的平和の確立と保証のために、ある特定の宗教に依存しない固有の土地を獲得しなければならなかった。そのようにのみ、それ〔政治的秩序〕は、政治的自律性を手に入れることができ、また、主張することができた。これは、宗教的平面と政治的平面とを原理的に区別することを通して、政治的秩序の純粋に世俗的任務と目的を定式化することを通して、この任務と目的において、教会的・宗教的要求に対して、それ〔政治的秩序〕が優越するという主張を通して生じた、また、そうしてしか生じることはできなかった……」<sup>(54)</sup>。その際注目すべきことは、宗教の自由が「指導原理」<sup>(55)</sup>となって国家の世俗化が生じたのではない<sup>(56)</sup>ということである。むしろ、宗教の自由は、「……一方では、教会的・宗教的不寛容をはねつけることにおいて、他方では、安全な秩序において、異なる宗教と宗派の人間がともに生活することを可能にすること、また、貫徹することへの政治的決定から」<sup>(57)</sup>、「帰結として」<sup>(58)</sup>生じたのである。つまり、宗教の自由を認めるために世俗化された国家を作り出したのではなくて、人々が平和に生活することができるために世俗化された国家を作り出した結果として、宗教の自由が生じたのである。

世俗化された国家が確立された現在において、伝統的正当化には歴史的意義以上の意義はあるのだろうか。ベッケンフェルデも、伝統的正当化は、「……なお正当化する力を有しているのだろうか」<sup>(59)</sup>と問いを投げかける。ベッケンフェルデは、伝統的正当化の正当化する力を「むしろ原理主義的方向づけられた宗教的運動が前方に押し進むことがあり得ることに対する障壁として」<sup>(60)</sup>評価している。伝統的正当化は、原理主義的宗教運動を押し留

めるものとなり得るというのである。また、ベッケンフェルデによれば、イスラムは、「……これまで、ほとんど、国家と宗教の原則的分離を受け入れるような状況にないように見える」<sup>(61)</sup>が、そのようなイスラムとの対話において、伝統的正当化は、現在でも、また、未来のことを考えても<sup>(62)</sup>、意義を失ってはいないのである。

## (二) 人権からの正当化

第二の正当化は、「人権から」<sup>(63)</sup>の「新たな正当化」<sup>(64)</sup>である。「人権の思想と原理は、国家の正当化を一般的に新たな基盤の上に置く」<sup>(65)</sup>。人権は、「すべての人間の共同体の基盤であること」を要求する<sup>(66)</sup>。「それ〔人権〕を保証すること、また、保障することは、あらゆる国家権力の中心的課題として、その本来的、また、新たな目的（Umwillen）としてあらわれる」<sup>(67)</sup>。「この人権には、中心的に、宗教の自由という基本権が属する……」<sup>(68)</sup>。すべての人間には人権が認められ、人権を保障するために国家が存在する。そして、人権の中心には、宗教の自由が存在する。世俗化された国家は、宗教の自由を中心とする人権を保障するためにあるというのである。「国家が、宗教を個人のために解放し、宗教への自由を、宗教からの自由と同様に保証する事態に行きつくことは、完全に承認され、また、実現されている」<sup>(69)</sup>。そういうわけで、「もはやそれ自身宗教的に拘束されるのではなくて、世俗的な、宗教に対して中立的な、したがって世俗化された国家の必然性と正当化」<sup>(70)</sup>は、国家が宗教の自由を保障することの中に含まれている<sup>(71)</sup>。

人権からの正当化は、「国家の宗教的中立の方法への影響」<sup>(72)</sup>がなくはない。「宗教の自由という人権」<sup>(73)</sup>は、「……私的領域においてだけではなくて、公的領域においても、宗教的自由に目標づけられており、宗教にしたがって生活を営む一般的可能性に目標づけられている……」<sup>(74)</sup>からである。「中立のふさわしい形式は、それゆえ、国家の開放的決定的中立であって、それは、宗教のこの公的展開の余地も保証する」<sup>(75)</sup>。「ライシテという距離を置く中立」<sup>(76)</sup>は、「中立のマイナーな形式として」<sup>(77)</sup>あらわれる。つまり、ここで、ベッケンフェルデは、フランス型の中立ではなくて、ドイツ型の中立を支持

することを明確に表明する。

もっとも、ベッケンフェルデは、「距離を置く中立」にも一定の意義を認める。「距離を置く中立は、特定の領域において、たとえば、公職への接近の際、また、法律の適用の際に必要であり得るし、また、有意義であり得る」<sup>(78)</sup>。「中立のこの形式〔距離を置く中立〕は、司法、また、警察においてのように、また、国家の職への等しい接近においてのように、直接的な、オリジナルな国家の高権的活動が問題であるところでは、ふさわしいように思われる」<sup>(79)</sup>。しかし、「距離を置く中立」は、「……決定的開放的中立によって包み込まれる、いわば、その中に引き入れられることなしには」<sup>(80)</sup>、「……中立の不完全な形式にすぎない……」<sup>(81)</sup>。つまり、フランスのライシテは、むしろ、中立のありかたとして不完全だというのである<sup>(82)</sup>。こうして、ベッケンフェルデによれば、ドイツ型の中立である「決定的開放的中立」が目指されるべきことになる。

### (三) 神学的正当化

第三の正当化は、「神学的正当化」<sup>(83)</sup>であり、より詳しく言えば、「政治神学から」<sup>(84)</sup>の正当化である。ベッケンフェルデは、キリスト教会、とりわけカトリック教会の宗教の自由についての立場と教義が新たなものになったことを指摘<sup>(85)</sup>し、次のように論ずる。カトリック教会は、19世紀においてなお、また、20世紀に入るまで、宗教の自由を厳格に拒絶し、そして、のちに、「……特定の状況においてより高い善のために受け入れられることができる許容されるべき悪として」<sup>(86)</sup>説明したのがせいぜいのところであった<sup>(87)</sup>。しかし、カトリック教会は、第二バチカン公会議の宗教の自由についての宣言でもって、大きくその立場を変えた<sup>(88)</sup>。「宗教の自由の承認は……譲歩から命令になったのである、その基盤をキリスト教信仰の中に、また、その〔キリスト教信仰の〕人間像の中に有する命令に〔なったのである〕」<sup>(89)</sup>。つまり、宗教の自由を求める権利は、初めはカトリック教会によって拒絶されていたが、第二バチカン公会議以降、人間の本性と尊厳に根ざすものとしてキリスト教信仰によって積極的に要請されるものになったのである。キリスト



教を信仰することが、かえって「信仰国家」<sup>(90)</sup>を否定することになるという一種の逆説が生じるのである。こうして、宗教の自由を神学的に基礎づけることは、「世俗化された開放的中立的国家」<sup>(91)</sup>に、「予期されていない援助」<sup>(92)</sup>をもたらすことになる。このように、カトリック教会の教義が新たなものとなったことによって、世俗化された国家に神学的正当化がもたらされたのである。

### 三 世俗化された国家が直面している問題

21世紀の今日において、世俗化された国家は、さまざまな問題に直面している<sup>(93)</sup>。これらの問題のうちの特に重要な二つの問いを、ベッケンフェルデは選び出す<sup>(94)</sup>。第一の問いは、「……自由な世俗化された国家は、現在、また、将来において、自由の秩序において有益な共同生活をするために不可欠である前・法的 (vor-rechtlicher) 共通点、また、支えるエートスの程度をどこから獲得して、また、どのように手に入れるのか」という問いである<sup>(95)</sup>。われわれが生きるに値する生活をするためには自由の秩序が必要であり、自由の秩序にはそれを支える基盤が必要であるが、自由の秩序はみずからを支える基盤をどこからどのように調達するのか、という問いである。第二の問いは、第一の問いとかわる問い<sup>(96)</sup>であり、その問いは次のようである。すなわち、自由な世俗化された国家が、「……宗教的伝統 (酵素 (Fermente)) によって刻印づけられている生かされた文化に、共通の拘束力をもつ基盤として頼らざるを得ないとすれば」<sup>(97)</sup>、「宗教・世界観の多元主義が進むこと、また、人口移動が増加することに鑑みて」<sup>(98)</sup>、自由な世俗化された国家は、みずからにとって構成的な、宗教の自由の保証、宗教的中立の保証、宗教共同体の同権の保証を、どの程度がんばり通すことができるのか、という問いである<sup>(99)</sup>。現在、宗教・世界観がますます多元化しており、また、人口移動が加速することによって社会の中には異文化出身の人々も増加している。第一の問いに対する答えとして、文化が世俗化された国家を支える基盤を供給するという答えが得られたとしよう。そうすると、文化



は宗教的伝統によって形成されている側面があるので、宗教の多元化によって本質的に変化する可能性がある。その結果、文化によって世俗化された国家を支えることができなくなり、世俗化された国家は、みずからにとって構成的な宗教の自由、宗教的中立、宗教共同体の同権を守りとおすことができなくなるのではないか、という問いである。

#### (一) 世俗化された国家を支える基盤の獲得

第一の問いは、世俗化された国家は、みずからを支える基盤をどのように調達するのか、という問いであった。その問いは、「……国家的共同体 (Gemeinwesen) が、とりわけ自由な共同体が、その生活能力を依存している前・法的 (vor-rechtlichen) 前提という、より大きな関連に属する」<sup>(100)</sup>。「いかなる国家も、権力の集中と強制力の行使にのみ基礎づけられているわけではない……」<sup>(101)</sup>。国家は、同時に、「……正当性を保証するはたらきを必要とし、また、それのおかげで、人間が決定的に自由意思で服従のはたらきをもたらす人間の考え方を必要とする」<sup>(102)</sup>。「国家的秩序は、この自由の前に横たわっている特定のわれわれという感情 (Wir-Gefühl) を伝達する統一する絆なしに、自己関係的個人的自由の保証からだけで生活することができる、というのは同様に幻想と考えるべきであろう」<sup>(103)</sup>。国家が存続するためには、前提条件として、国家を支えるエトスを人々に伝達することが必要になる。国家は、それが権力や強制力を有すれば国民をしたがわせることができるかもしれない。しかし、権力や強制力を有するからといって、国家が存続できるわけではない。国家は、人々が正当性を認めなければ、また、国家にみずから服従しようという考え方をもった人々が存在しなければ、存続できないのである。そして、国家は、個人に自由を保障すれば存続できるというわけではなくて、われわれがわれわれとして連帯する感情を伝達する統一する絆がなければ存続できないのである。「この統一する絆は……多くの小面を有する」<sup>(104)</sup>が、世俗化された国家の問題について考察する際に重要なのは、「文化的・精神的要因」<sup>(105)</sup>である。それでは、文化的・精神的要因として、どのようなものが考えられるだろうか。

## (1) 宗教

まず、宗教が、世俗化された国家を支える基盤を伝達するものとして考えられる。「……宗教の自由と世俗化された国家を受け入れるところのひとつの宗教、あるいは、より多くの宗教を国家が目の前に見出すならば……それ〔国家〕には、そこから、まったく、統一する絆、また、支え安定化させる力が与えられることができる」<sup>(106)</sup>。ただし、「前提は……宗教が、その信者たちにおいて、市民たちにおいて生きており、また、生かされた宗教として振る舞いに関する効果を展開することである」<sup>(107)</sup>。確かに、宗教の自由と世俗化された国家を受け入れる生きた宗教は、世俗化された国家を支えるエートスを伝達することが可能であるように見える。

しかし、世俗化された国家は、そのような宗教を手にしていない<sup>(108)</sup>。「それ〔世俗化された国家〕によって保証された宗教の自由は、宗教と宗教的生活性の〈可能性〉を保証するだけであって、宗教の存続を保証しない。もちろん、国家は、宗教と宗教的生活力を、それが事実上現存する限り、支え、また、保護することはできるし、また、そうすべきである」<sup>(109)</sup>。つまり、世俗化された国家は、宗教の自由によって、宗教の存続の可能性を保証することしかできない。しかし、世俗化された国家は、現に存在する限りで宗教を守ることができる。そして、ベッケンフェルデによれば、現に存在する宗教を守るとは、「……要求された宗教的・世界観的中立と完全に調和しうる」<sup>(110)</sup>。宗教は、それが宗教の自由と世俗化された国家を受け入れる生きた宗教であれば、世俗化された国家を支えることができるように見える。しかし、宗教の自由は、宗教の存続を保証するものではないし、ドイツにおけるキリスト教徒の減少傾向に鑑みれば<sup>(111)</sup>、宗教が世俗化された国家を支える基盤となるとしても、それは限られた意味しかない。ただし、国家は、宗教を現状維持することはできるのであって、そのことは国家の宗教的中立に反しないのである。

## (2) 市民宗教

次に、「支え、また、エートスを伝達する力」<sup>(112)</sup>として考えられるのは、

「市民宗教」<sup>(113)</sup>である。ベッケンフェルデは、市民宗教の概念の明確化が必要である<sup>(114)</sup>として、二つの意味をあげる。

市民宗教の第一の意味は、「宗教的文化のある種の手持ち」<sup>(115)</sup>である。これは、たとえば、国家元首が職に就くときに宣誓するようなことである<sup>(116)</sup>。こうしたことによって、「……世俗的共同体（Gemeinwesen）が間接的に宗教的に正当化される」<sup>(117)</sup>。つまり、宗教との関連を象徴的に表現する市民宗教によって、世俗化された国家を支える力を得るというのである。「しかしながら、この形態において、市民宗教が、生かされた宗教の不足すること、あるいは、弱くなることによって発生する欠落を充填することはほとんどできないだろう」<sup>(118)</sup>。第一の意味の市民宗教は、象徴的な事柄を通して、世俗化された国家を支える効果を得ようというものであるが、ベッケンフェルデは、この意味の市民宗教を有益なものとは見ていない<sup>(119)</sup>。

市民宗教の第二の意味は、「……ルソーが、彼の〈社会契約論〉の最後から2番目の章において展開したような『市民の宗教』と結びつけられている。市民宗教は、そのとき、共同体（Gemeinwesen）の存続のための維持イデオロギーを意味し、価値の基盤として拘束力をもっている」<sup>(120)</sup>。そのような市民宗教は、「……国家的秩序の価値基盤として宣言される……」<sup>(121)</sup>ののだが、「不寛容」<sup>(122)</sup>である。そのような市民宗教は、「……ポジティブな信仰告白を要求し、ひとは、考え方に関して、また、心的態度に関してその土地の上に立たなければならず、それは回避することを大目に見ることはできず、自由はその基盤の上、また、その枠内においてのみ存在する」<sup>(123)</sup>。

こうして、世俗化された国家が、第二の意味の市民宗教を「自己安定化の目的」<sup>(124)</sup>のために導入することには危険が伴うことになる<sup>(125)</sup>。「『基本法の価値秩序』を絶えず引き合いに出すこと」<sup>(126)</sup>、また、すべての人が基本法の価値秩序に信仰告白しなければならないことに固執すること<sup>(127)</sup>が、「入口」<sup>(128)</sup>である。そして、「……特定の心的態度を信仰告白すること、は

つきり示すことが前提として要求され、自由は、それとともに、そのように引かれた枠へ限定される」<sup>(129)</sup>。「原理主義は、価値秩序原理主義の形においても発生することができる」<sup>(130)</sup>。つまり、第二の意味での市民宗教は、それが基本法の価値秩序に対する信仰告白であっても、かえって自由を縮減することになってしまうのである。

### (3) 文化

これまでの検討から、世俗化された国家を市民宗教によって支えることは困難になった<sup>(131)</sup>。そこで、ベッケンフェルデは、世俗化された国家を文化によって支えることが可能かどうかを問う<sup>(132)</sup>。すなわち、「支えるエートスも伝達する共通の絆としての文化への……問い」<sup>(133)</sup>が提起される。「文化において、精神的な力、メンタルな所与性、また、伝統は、ともに作用し、習慣的な考え方、また、それと結びついたエートスへと形作られる」<sup>(134)</sup>。文化は、世俗化された国家を支えるエートスとなるのである。そのような文化は静的なものではなく、「……特に世俗化された国家においては、自由において、また、自由な、また自発的な動因から生きている」<sup>(135)</sup>。

世俗化された国家は、「現存する、また、生かされた文化を支えること、そして、それができる限りで、保護すること」<sup>(136)</sup>を指示されている。世俗化された国家は、「……それ自身のために、文化の養育を本来的な意味において営まなくてはならない……」<sup>(137)</sup>。もちろん、世俗化された国家が文化の養育を営むのは、自由と両立し得る範囲において、「その自由の秩序の枠内において」<sup>(138)</sup>である。ここで、文化を育むための行動領域として、「学校の教育委託 (der schulische Erziehungs- und Bildungsauftrag)」<sup>(139)</sup>があげられている。世俗化された国家は、学校教育における活動などを通して文化を維持涵養し、そうして維持涵養された文化によってもたらされるエートスでみずからを支えるというのである。

### (二) 現代における多元化と文化

ここで、議論は第二の問いに移行する<sup>(140)</sup>。世俗化された国家は、今日、

また、将来において、ますます、共通点を伝達し、また、国家的秩序を支えるエートスを生み出す文化を必要とする<sup>(141)</sup>。「……しかし、この文化は、周辺においてだけではなくて、広く、特定の宗教的根底から、それによって刻印づけられた伝統と振る舞いの態様から形成された」<sup>(142)</sup>。つまり、文化は、宗教的色彩を色濃くおびたものなのである。ここで、ベッケンフェルデは、次のような問いを投げかける。すなわち、移民の増大によって、また、国際的な移住の増加によって、多様化の方向において文化が再編成されているとき、世俗化された国家は、「……完全な宗教の自由、宗教的中立、また、あらゆる宗教の同権を保証することができるのか……」<sup>(143)</sup>という問いである<sup>(144)</sup>。世俗化された国家は、みずからを文化によって維持する。その文化は宗教によっても刻印づけられている。今日のような国際交流が激しく、多様化の一途をたどる時代においては、文化それ自体が変化せざるを得ない。そのような中で、世俗化された国家は、それでもなお、文化によってみずからを維持し、世俗化された国家にとって要となる宗教の自由、宗教的中立、あらゆる宗教の同権を守り通すことができるのか、ということが問われるのである。

#### (1) 宗教の自由と少数派

問題を明確化するために、ベッケンフェルデは、ラッツィンガーとの手紙によるやり取りを紹介する<sup>(145)</sup>。その上で、ラッツィンガーとなされた議論の本質は、ベッケンフェルデにとっては、以下のことの中にあると述べる<sup>(146)</sup>。「……一方では、宗教の自由は、人権として、文化留保の下に立たないし、また、立つことは許されない。他方では、宗教の自由と宗教の同権からは、文化と生活形態の宗教的に定義づけられた刻印づけの均等化を求める何らの請求権も、……発生させることができない」<sup>(147)</sup>。そして、ベッケンフェルデは、「……他の宗教の構成員（たいていの場合少数派宗教）は、少数派（Diaspora）において生活する」<sup>(148)</sup>という。文化を根拠として宗教の自由という人権を認めないということは許されない。その意味で、宗教の自由という人権には普遍性が認められる。それでは、すべて

の宗教に等しい待遇が与えられるのかということ、そうではない。宗教の自由、宗教の同権は認められているが、その文化の根底を形成するのに寄与していない宗教の構成員は、文化の均等化を求めることはできないというのである。そうだとすると、宗教的少数派は、文化的にも少数派として生活することが求められていることになる。そして、ベッケンフェルデによれば、「少数派におけるそのような生活について……イスラムとユダヤ教は、明らかに、国（Land）の法律と慣習を尊重するという指示を含む」<sup>(149)</sup>。イスラムとユダヤ教に関する限り、みずからが宗教的少数派であるところでは、法律と慣習にあらわれる多数派の意思を尊重することが、教義自体から要請されているというのである。

## (2) 自由に関連づけられた法律の遵守

以上の議論を前提にするとして、問題を解決するためには、どのようにすればよいのだろうか<sup>(150)</sup>。

ベッケンフェルデは、以下のように言う。「宗教的・文化的多様性がますます増大し、むしろ異質化していることに鑑みれば、国家の厳格に距離を置く中立への移行が容易に思いつかせることができるだろう……」<sup>(151)</sup>。つまり、「そのような多様性を私的領域に押し込め、また、公的共同生活をそれから解放すること」<sup>(152)</sup>が考えられる。実際、フランスのライシテは、そのような方法をとる<sup>(153)</sup>。しかし、ベッケンフェルデによれば、このような方法は、「……何らの支えることができる解決をもたらさない」<sup>(154)</sup>。それは、なぜか。「人間は半分だけであること、また、私的だけであることを欲しないのであって、その根底から全体へと生活することができることを欲し、そこから切り離されないことを欲する。そして、人間はそれを求める請求権を有する」<sup>(155)</sup>。「得ようと求められた統合も、彼らにそのアイデンティティを放棄することを代償として要求することなしに、人間を共通の秩序の中に引き入れるという目標を有する。そして、それは、まさにそれを通して純粋な同化と区別される。統合は、固有の根底から生活できることを前提とする」<sup>(156)</sup>。人間は、その本性からして、全体として生活

することができなければならない。私的領域と公的領域を区別して生活するということは、人間の本性に反することなのである。そして、統合は、同化と異なり、人間のアイデンティティを保持したままの共同生活を可能にするので、統合が目指されなければならないというのである。そのためには、どのようにすればよいのだろうか。ベッケンフェルデは、「……多様性に公的余地も与え、それゆえに、固有の秩序の基本形態を解消することのない、開放的・決定的中立の下にとどまらなければならない」<sup>(157)</sup>という。つまり、ドイツ型の中立である「決定的・開放的中立」が維持されなければならないというのである。

こうして、「解決への道は……開放的で世俗的な自由の秩序を安定化させることの中にある」<sup>(158)</sup>。そのために必要であるのは、「自由に関連づけられた、しかし、自由を制限もする法律」<sup>(159)</sup>である。「そのような自由に関連づけられた法律は、首尾一貫して、また、非党派的に適用されるのだが、新しい種類の統一する絆を、多元的で部分的には対抗する文化的現実性を越えてもたすことができる。すなわち、破られない、理性に支えられた法律の秩序の中で、また、そのもとでの生活の共通性」<sup>(160)</sup>。自由を保障する法律にしたがって生活すれば、世俗化された国家を持続させることができるので、そのような法律を遵守することが求められるというのである。

ここで議論は再び、「世俗化された国家における必要的な共通性と支えるエートスへの問い」<sup>(161)</sup>へと戻る。多様性を克服するのは、「その境界づけがすべての者によって等しく遵守されるべき自由に関連づけられた法律の下での共通の生活」<sup>(162)</sup>である。「……価値への信仰告白の代わりに……法律への忠誠が、共通の共同生活の基盤になる。法律性という付属的なエートスが、そのような秩序とともに支えることができ、また、安定化させることができる」<sup>(163)</sup>。自由に関連づけられた法律を遵守することこそが、世俗化された国家を支えるエートスなのである。

### (三) 世俗化された国家とイスラムとの関係



ここで、ベッケンフェルデは、次のような新たな問いを立てる。「……国家と宗教の原則的分離を受け入れず、また、それとともに、世俗的国家を受け入れず、そして、こうしたことは、神学的理由からなすことができないと考える宗教と宗教的信条に対しても」<sup>(164)</sup>、自由に関連づけられた法律の下で共同生活を営むという構想は実行可能なのだろうか、という問いである<sup>(165)</sup>。「この問いは、イスラムとの関係にとって、また、イスラムと信仰において結びつけられている人々の世俗化された国家への統合の可能性にとって重要である……」<sup>(166)</sup>。もっと具体的に言えば、「どの程度、イスラムとムスリムに、世俗化された国家とその秩序の承認を求めることができるのか、また、それが許されるのか、いや、それをしなければならないのか」<sup>(167)</sup>ということである。

これまでの考察からすれば、世俗化された国家を維持するためには、ムスリムにも法律を遵守することを求めなければならない。それでは、ムスリムは、現に妥当する法律を承認し、また、遵守することについて、どのように考えているのだろうか<sup>(168)</sup>。ベッケンフェルデは、ドイツムスリム中央評議会の原則宣言を参照して、イスラム法は、少数派にいるムスリムを原則的に地域的な法秩序を守るように義務づけていることを指摘する<sup>(169)</sup>。

それでは、「世俗化された国家がその基盤を有している、宗教と国家の分離という原理についての原則的考え方」<sup>(170)</sup>に対するムスリムの態度は、どのようなであろうか。ベッケンフェルデによれば、この問いは、上述したドイツムスリム中央評議会の原則宣言では、なお答えられていない<sup>(171)</sup>。「……というのは、これは、少数派の状況にしかかわっていないから」<sup>(172)</sup>である。そこで、ベッケンフェルデは、「……もし少数派の状況がもはや存続しなくなったら」<sup>(173)</sup>、どのようなになるのかという問いを立てる<sup>(174)</sup>。ムスリムが多数派になったときには、「宗教と国家の分離の拒否」<sup>(175)</sup>が、実現されることになるのだろうか。

#### (1) 世俗化された国家のイスラムへの提案

ベッケンフェルデによれば、「世俗化された国家は、イスラムとその信

奉者に、二つの側面を有する提案をする」<sup>(176)</sup>。その提案は、「ひとつの側面」<sup>(177)</sup>において、イスラム教徒に、法律への忠誠を期待し、また、要求する<sup>(178)</sup>。その際、「内的な留保」<sup>(179)</sup>はそのままにしておかれる。その提案は、「……同権の市民としての地位を、その条件としての価値秩序への信仰告白に結びつけず、法律の尊重、また、遵守でもって満足する……」<sup>(180)</sup>のである。外面である行動において法律を遵守していれば、内面にまでは干渉しないというわけである。その意味で、この提案は自由な性格をもっている<sup>(181)</sup>。このような構想は、決して空想的ではないのであって、実際、カトリックは、この態様において世俗化された国家に統合されることができたのである<sup>(182)</sup>。

それでは、その提案のもうひとつの側面は、どのようなであろうか。「他面において、世俗化された国家は……いかなる宗教的信条にも、宗教の自由の主張の下で、また、民主的可能性の利用の下で、開放性の上におかれているその秩序を内側から巻き、そして、最終的に解体する機会を与えることはできないし、また、与えることは許されない」<sup>(183)</sup>。宗教の自由を使って、あるいは、民主的な多数派形成を通して、自由な秩序を破壊することは許されないというのである。そのように考えると、もしイスラムが、政治的な多数派形成によって、宗教の自由に対して抵抗し、宗教の自由を解体しようとするならば、「……国家は、この宗教、あるいは、その信奉者が少数者の地位にとどまるように配慮しなければならない……」<sup>(184)</sup>ことになる。世俗化された国家を維持するためには、それを解体しようとする者が多数派を形成できないようにしなければならないというのである。

## (2) 世俗化された国家の自己防衛

ベッケンフェルデは、次のように議論を続ける。「したがって、イスラムが、その流儀にしたがって、宗教と国家の原則的分離に向けて、また、世俗化された国家の承認に向けて、どの程度伝達可能であるかということとは、基本問題のままである」<sup>(185)</sup>。「そのような伝達は、イスラムはその教書の真実性と普遍的妥当性から出発しているからという理由で、すでに排

除されていない」<sup>(186)</sup>。キリスト教会ですら、カトリック教会は特に、「……宗教の自由と世俗化された国家の承認に同意した」<sup>(187)</sup>のである。「すなわち、問題は、イスラムにとって、パラレルな発展が、特にカトリック教会において行われたような発展の一種の迫体験が、自己放棄なしに可能と思われるかどうかである」<sup>(188)</sup>。カトリック教会も、その歴史において、「宗教の自由と宗教と国家の分離に反対するあらゆる立場」<sup>(189)</sup>を主張したのである。

ベッケンフェルデは、この問題に答えることは自分の権限を超えていると言う<sup>(190)</sup>。しかし、イスラムがカトリック教会と同じような発展をすることができるのであれば、何らさらなる原理的な問題は発生しないはずである<sup>(191)</sup>。イスラムがカトリック教会と同じような発展をすることができないのであれば、国家は、イスラム教徒が多数派になることを阻止する障壁を設けなければならない<sup>(192)</sup>。ベッケンフェルデによれば、「そこには自己矛盾は何らないのであって、世俗化された国家の固有の自己防衛があるだけである」<sup>(193)</sup>。世俗化された国家は、自己防衛することができるし、自己防衛しなければならないのである。もしイスラムが世俗化された国家を受け入れないのであれば、世俗化された国家は、イスラムが少数派の地位にとどまるようにしなければならないのである。

おわりに

世俗化された国家は、異なる宗教的信条や異なる世界観を有する人々が、平和に生活することができるために作り出された<sup>(194)</sup>。そのようにして作り出された世俗化された国家は、宗教から切り離され、宗教と中立にかかわらなければならない<sup>(195)</sup>。世俗化された国家は、伝統的正当化、人権からの正当化、神学的正当化という三つの正当化根拠を有する<sup>(196)</sup>。世俗化された国家は、みずからを支えるエートスを必要とするが、それを伝達するのは文化である<sup>(197)</sup>。今日、文化が多元化の一途をたどる中で、世俗化された国家は、文化を維持涵養することによって、また、自由に関連づけられた法律の遵守

を求めることによって、みずからを維持することができる<sup>(198)</sup>。

世俗化された国家が、宗教の自由を認める自由の秩序であるとすれば、多様な宗教・世界観に対して開かれていることになる。しかし、ベッケンフェルデの議論からすれば、世俗化された国家が開かれているということは、あらゆる宗教・世界観に対して、まったく無防備に開かれているということではない<sup>(199)</sup>。世俗化された国家は、宗教の自由を中心とする自由を人間に保障しなければならないが、同時に、自由の秩序を維持しなければならないのである。自由を用いて自由の秩序を否定しようとする者に対して、世俗化された国家は自己防衛しなければならないが、「その自由の秩序の枠内において」<sup>(200)</sup>みずからを支える文化を維持涵養することは、自己防衛の有力な手段となるはずである。こうして、世俗化された国家は文化とかかわらなくてはならないことになるが、世俗化された国家が文化を維持涵養することができる領域として、ベッケンフェルデは「学校のエデュケーション」<sup>(201)</sup>をあげていた。それでは、世俗化された国家は、学校のエデュケーションを通して、どのようにみずからを維持するのか。この点についての検討を今後の課題としたい。

---

注

- (1) Ernst-Wolfgang Böckenförde, *Der säkularisierte Staat. Sein Charakter, seine Rechtfertigung und seine Probleme im 21. Jahrhundert*, 2007, SS.11-41.(この論文を、以下では、Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.)と記す。)
- (2) 本論文「一 世俗化された国家の性格」。Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), SS.12-16.
- (3) 本論文「二 世俗化された国家の正当化」。Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.12, SS.16-23.
- (4) 本論文「三 世俗化された国家が直面している問題」。Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.12, SS.24-41.
- (5) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.11.
- (6) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.11.
- (7) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.12; vgl. Ernst-Wolfgang Böckenförde, *Der säkularisierte, religionsneutrale Staat als sittliche Idee-Die Reinigung des Glaubens durch die Vernunft*, in: ders., *Wissenschaft, Politik, Verfassungsgericht*, 2011, S.85. (この論文を、以下では、Böckenförde, a.a.O. (Anm.7.)と記す。)
- (8) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.12; vgl. Böckenförde, a.a.O. (Anm.7.), S.85; vgl.

Ernst-Wolfgang Böckenförde, Bekenntnisfreiheit in einer pluralen Gesellschaft und die Neutralitätspflicht des Staates, in: ders., Kirche und christlicher Glaube in den Herausforderungen der Zeit, 2., erweiterte Auflage, fortgeführt bis 2006, 2007, S.446. (この論文を, 以下では, Böckenförde, a.a.O. (Anm.8.)と記す。)

- (9) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.12; Böckenförde, a.a.O. (Anm.7.), S.85.
- (10) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.12; vgl. Böckenförde, a.a.O. (Anm.7.), S.85.
- (11) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.12; vgl. Böckenförde, a.a.O. (Anm.7.), S.85.
- (12) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), SS.12-13; vgl. Böckenförde, a.a.O. (Anm.7.), S.85; vgl. Böckenförde, a.a.O. (Anm.8.), S.446.
- (13) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.12, S.13; vgl. Böckenförde, a.a.O. (Anm.7.), S.85.
- (14) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.13.
- (15) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.13; vgl. Böckenförde, a.a.O. (Anm.7.), S.86.
- (16) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.13.
- (17) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.13; vgl. Böckenförde, a.a.O. (Anm.7.), S.86.
- (18) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.13; vgl. Böckenförde, a.a.O. (Anm.7.), S.86.
- (19) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.13; vgl. Böckenförde, a.a.O. (Anm.7.), S.86.
- (20) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.13; vgl. Böckenförde, a.a.O. (Anm.7.), S.86.
- (21) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.13; vgl. Böckenförde, a.a.O. (Anm.7.), S.86.
- (22) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.14.
- (23) Vgl. Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.14; vgl. Böckenförde, a.a.O. (Anm.7.), S.86.
- (24) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.14; vgl. Böckenförde, a.a.O. (Anm.7.), S.86.
- (25) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.14; vgl. Böckenförde, a.a.O. (Anm.7.), S.86; vgl. Böckenförde, a.a.O. (Anm.8.), S.446.
- (26) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.14.
- (27) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), SS.14-15.
- (28) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.14; vgl. Böckenförde, a.a.O. (Anm.7.), S.86.
- (29) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.14; vgl. Böckenförde, a.a.O. (Anm.7.), S.86.
- (30) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), SS.14-15.
- (31) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.15.
- (32) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.15.
- (33) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.15; vgl. Böckenförde, a.a.O. (Anm.7.), S.86.
- (34) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.15; vgl. Böckenförde, a.a.O. (Anm.7.), S.86; vgl. Böckenförde, a.a.O. (Anm.8.), SS.446-447. フランスのライシテが例としてあげられている。
- (35) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.15; vgl. Böckenförde, a.a.O. (Anm.7.), S.87; vgl. Böckenförde, a.a.O. (Anm.8.), SS.447-448. ドイツが例としてあげられている。
- (36) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.15; vgl. Böckenförde, a.a.O. (Anm.7.), SS.86-87.
- (37) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.15; vgl. Böckenförde, a.a.O. (Anm.7.), S.87.
- (38) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.16; vgl. Böckenförde, a.a.O. (Anm.7.), S.87.

- (39) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.16 ; vgl. Böckenförde, a.a.O. (Anm.7.), S.87.
- (40) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.16 ; vgl. Böckenförde, a.a.O. (Anm.7.), S.87.
- (41) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.16 ; vgl. Böckenförde, a.a.O. (Anm.7.), S.87.
- (42) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.16 ; vgl. Böckenförde, a.a.O. (Anm.7.), S.87.
- (43) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.16 ; vgl. Böckenförde, a.a.O. (Anm.7.), S.87.
- (44) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.16 ; vgl. Böckenförde, a.a.O. (Anm.7.), S.87.
- (45) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.16.
- (46) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.16.
- (47) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.16.
- (48) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.16.
- (49) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.16.
- (50) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.17.
- (51) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.17.
- (52) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.17.
- (53) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.17.
- (54) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.17.
- (55) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.17.
- (56) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.17.
- (57) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), SS.17-18.
- (58) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.17.
- (59) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.18.
- (60) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.18.
- (61) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.18.
- (62) Vgl. Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.18.
- (63) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.18.
- (64) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.18.
- (65) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.18.
- (66) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.19.
- (67) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.19.
- (68) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.19.
- (69) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.19.
- (70) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.19.
- (71) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.19.
- (72) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.20.
- (73) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.20.
- (74) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.20.
- (75) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.20.
- (76) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.20.
- (77) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.20.

- (78) Böckenförde, a.a.O. (Anm.7.), S.88.
- (79) Böckenförde, a.a.O. (Anm.8.), S.447.公職への接近が、宗教上の信仰告白に左右されないことは、基本法33条が明文で定めている。Böckenförde, a.a.O. (Anm.8.), Anm. 14.
- (80) Böckenförde, a.a.O. (Anm.7.), S.88.
- (81) Böckenförde, a.a.O. (Anm.7.), S.88.
- (82) ライシテと中立の関係についてのベッケンフェルデの考えについて、次の論文も参照。Vgl. Böckenförde, a.a.O. (Anm.8.), S.448.
- (83) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.20.
- (84) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.20.
- (85) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.20.
- (86) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.21.
- (87) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), SS.20-21 ; vgl. Böckenförde, a.a.O. (Anm.7.), S.84.
- (88) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.21 ; vgl. Böckenförde, a.a.O. (Anm.7.), S.85, S.89 ; vgl. Böckenförde, a.a.O. (Anm.8.), S.454.
- (89) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.22.
- (90) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.23 ; Böckenförde, a.a.O. (Anm.7.), S.90. ベッケンフェルデは、教皇ヨハネ・パウロ 2 世の発言を紹介した上で、それは、「……間接的に定式化されているのではあるが、信仰国家のはっきりとした拒否であり、また、国家の開放的決定的な宗教的中立への一義的告白」(Böckenförde, a.a.O.(Anm.1.), S.23 ; vgl. Böckenförde, a.a.O. (Anm.7.), S.90.) であると述べている。(Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), SS.22-23 ; Böckenförde, a.a.O. (Anm.7.), S.90 ; vgl. Böckenförde, a.a.O. (Anm.8.), SS.454-455.)
- (91) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.22.
- (92) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.22.
- (93) Vgl. Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.24.
- (94) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.24.
- (95) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.24.
- (96) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.24.
- (97) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.24.
- (98) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.24.
- (99) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.24.
- (Ⅲ) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.24. これは、「<自由な世俗化された国家は、それ自身が保証することのできない前提によって生活する>」(Böckenförde, a.a.O.(Anm.1.), S.8. < >内は、原文斜体である。) というベッケンフェルデのテーゼとかかわっている。
- (Ⅳ) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.24.
- (Ⅴ) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), SS.24-25.
- (Ⅵ) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.25. 「われわれという感情 (Wir-Gefühl)」について



ては、次の論文も参照。Vgl. Ernst-Wolfgang Böckenförde, Europa und die Türkei, in: ders., Wissenschaft, Politik, Verfassungsgericht, 2011, S.289.

- (104) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.25.
- (105) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.25.
- (106) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.25.
- (107) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.25.
- (108) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.25.
- (109) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.26. < >内は、原文斜体である。
- (110) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.26.
- (111) Vgl. Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), SS.26-27.ドイツの状況を前提とすれば、ここで考えられている宗教は、キリスト教ということになる。
- (112) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.27.
- (113) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.27.
- (114) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.27.
- (115) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.27.
- (116) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.27.
- (117) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.28.
- (118) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.28.
- (119) Vgl. Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.30.
- (120) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.28. < >内は、原文斜体である。
- (121) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.28.
- (122) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.28.
- (123) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), SS.28-29.
- (124) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.29.
- (125) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.29.
- (126) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.29.
- (127) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.29.
- (128) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.29.
- (129) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.29.
- (130) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), SS.29-30.
- (131) Vgl. Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.30.
- (132) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.30.
- (133) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.30.
- (134) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.30.
- (135) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.30.
- (136) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.31.
- (137) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.31.
- (138) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.31.
- (139) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.31.

- (140) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.31.
- (141) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.31.
- (142) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.31.
- (143) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.32.
- (144) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), SS.31-32.
- (145) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), SS.32-34. ラッツィンガーは、ベッケンフェルデと  
の手紙のやり取りの当時は枢機卿であったが<sup>3</sup>, 後に教皇ベネディクト16世となる。
- (146) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.34.
- (147) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.34.
- (148) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.34.
- (149) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.34.
- (150) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.34.
- (151) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.34.
- (152) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.34.
- (153) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.34.
- (154) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.34.
- (155) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), SS.34-35.
- (156) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.35.
- (157) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.35.
- (158) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.35.
- (159) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.35.
- (160) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.36.
- (161) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.36.
- (162) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.36.
- (163) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.36.
- (164) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.37.
- (165) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.37.
- (166) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.37.
- (167) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.37.
- (168) Vgl. Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.37.
- (169) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.37.
- (170) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.37.
- (171) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), SS.37-38.
- (172) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.38.
- (173) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.38.
- (174) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.38.
- (175) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.38.
- (176) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.38.
- (177) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.38.

- (173) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.38.
- (174) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.38.
- (180) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.38.
- (181) Vgl. Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.38.
- (182) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.38.
- (183) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.39.
- (184) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.39.
- (185) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), SS.39-40.
- (186) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.40.
- (187) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.40.
- (188) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.40.
- (189) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.40.
- (190) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.41.
- (191) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.41.
- (192) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.41.
- (193) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.41.
- (194) 本論文「はじめに」参照。
- (195) 本論文「一 世俗化された国家の性格」参照。
- (196) 本論文「二 世俗化された国家の正当化」参照。
- (197) 本論文「三 世俗化された国家が直面している問題」参照。
- (198) 本論文「三 世俗化された国家が直面している問題」参照。
- (199) Vgl. Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.39, S.41.
- (200) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.31.
- (201) Böckenförde, a.a.O. (Anm.1.), S.31.